



馬耳東風

筆者が30歳代後半の頃、韓国で開催されたある会議に出席したことがある。この時全南大学のK教授と1週間、行動をともにした。彼は以前筆者がいた大学の研究室に留学生として在籍しており、筆者とは旧知の間柄であった。会議は韓国の各地で開催され、移動は貸し切りバスであったが、長時間に亘ることが多かったので、この時間を利用してK教授にハングルを教えて貰うことになった。ハングル（訓民正音）は、李氏朝鮮の第4代国王世宗が、朝鮮語を表記するため若い学者たちに命じて作らせた表音文字であり、きわめて合理的な構造で、誰でもすぐ使えるように工夫されているというくらいのごときは受験の世界史の知識として知っていたが、実際の文字については全く白紙であった。で、この時初めてハングルは、日本語をローマ字表記するように、子音と母音の組み合わせで一つの音を表すことを教わった。なるほど合理的にできた文字であり、順調に理解していったが、「カ」の文字でつまづいてしまった。今の日本語は、清音（カ）と濁音（ガ）の2種類しかないが、朝鮮語では激音および濃音と言われる「カ」があり、それぞれ「カハ」、「ッカ」のように発音するという。しかし筆者にはその違いが全くわからなかった。K教授は、この文字は、「カハ」、そちらの文字は、「ッカ」と何度もゆっくりと発音してくれるのだが、筆者にはみんな同じ平音の「カ」と同じに聞こえてしまうのである。彼はもどかしそうに、しかし辛抱強く、何度も何度も発音してくれたが、何度聞かされても同じであった。終いにはK教授は泣き出さんばかりになったほどである。表音文字であるから発音がわからなければお手上げである。かくてバスの中の勉強会は中止になってしまったが、このとき筆者は、

「語学は若いうち」という言葉を実感したものであった。

それから20数年後、必要に迫られてそれまで全く知らなかったスペイン語を勉強し始めた。日本語はもちろんのこと、英語ともかなり異なる文法体系のためか、最初はまるで暗号を勉強しているような気分であった。しかし、スペイン語は朝鮮語のような難しい発音はなく、rとlの区別以外は日本語とほぼ同じであるため発音に苦しめられることはなかった。最初は暗号のように感じられた文法も、慣れてくると言葉として受け入れられるようになり、年齢からくる記憶力の衰えは別として、初めてハングルを教えて貰ったときのような「語学は若いうち」をあまり感じないで勉強が続けられている。このような体験から、筆者は「語学は若いうち」は、「発音」に関してはその通りであるが、文法の理解、文章の読解や作文にはあまり当てはまらないのではないかと考えるようになっている。

さて、2009年度より小学校で英語教育が始まった。これは教科ではなく、外国語活動というらしく、そのため教員免許は必要ないということである。この教員免許は必要ないという点を生かして、小学校の英語が、すべてnative speakerにより教えられるなら、発達途上の言語脳は、容易に英語の発音も日本語と同じように受け入れることができ、大きな教育効果があがるであろう。しかし、native speakerならぬ教員免許を持たない英語が必ずしも得意ではない日本人に教えられれば、かえって変な発音を身につけてしまうのではないかと危惧するのは杞憂であろうか。筆者は現状の小学校の英語教育が、『これからの国際化時代をにらんで、中学校の前段階として「コミュニケーション能力の素地を養う」（小学校学習指導要領・目標）』ことになるとはとても考えられないでいる。 (久)